



言葉は親が教える風潮を作り出さないと。

J.P.モルガン・アセット・マネジメント株式会社 取締役相談役
安田 弘氏

1933年東京都出身。学習院大経済学部卒。沖電気を経て、79年ジャーディン・マセソン・ジャパン入社、83年代表取締役社長、89年代表取締役会長。95年ジャーディン フレミング投信・投資顧問会長。2002年JPモルガン・アセット・マネジメント取締役相談役就任。安田不動産顧問、安田商工教育会（安田学園）理事長、マンダリン・オリエンタル・東京取締役相談役、明治安田生命相互会社監査役、セコム監査役、(財)東京市政調査会監事を兼任。

池崎 本日は学校や家庭でのことばのしつけや教育についてお伺いしたいと思っております。よろしくお願い致します。

まず現在、大学を卒業した際にはじめて社員教育の一環として敬語、待遇表現などの「ビジネス日本語」を習うという現状があります。ですが、これはもっと小さいうちから家庭でのしつけのなかで教えるべきものではないかと考えております。幼稚園、保育園に入った際にはじめて家庭から別の社会に出ることになりますので、その時が「社会人一年生」と考えた方が良くと思うのです。小さい頃はまずお食事前の「いただきます」という謙譲語を習いますが、このような言葉をはじめとして幼稚園、小学校、中学校とそれぞれ教えてゆけば、待遇表現にも早くから慣れていきます。そういうことを是非強く訴えて生きたいと思っております。これが私の考える「ビジネス日本語元年」という意味です。この度BNAニュース発行に際しまして、安田会長には日本の企業経営者としてのお立場から是非ご意見を伺いたいと思っております。

子供のしつけとしての ビジネス日本語教育

安田 ぼく達の頃は言葉のしつけは非常に厳しかったように思います。やっぱり、子供の頃というのは、親、先生、年上の真似をする事がとても大事でしたから「行ってまいります」「ただ今帰りました」これらをちゃんと言わないと叱られました

たよね。また、間違えていたりすると「そんな言葉はありません」などと注意されたりもしました。子供の時に習うとずっと覚えていますし。途中から教えようと思っても難しいのではないですか。

今変なことば使う人が多いでしょう。自分の両親のことを話すときに敬語を使ったり、犬にまで敬語使っちゃったりするでしょう(笑)。むちゃくちゃです。それらはやっぱりしつけの問題ですから子供の頃からやってないと身に付かないですよ。

もう一つ、日本語をちゃんと使うためには出来るだけ日本語を話しているときは日本語だけで話すべきだと思います。英語を混ぜて話す人は多いですが、そうすると表現がおかしくなりますよ。しかし、英語を使うとね、不正確な英語でも何か偉そうに聞こえちゃうんですね。ことに学者、教授などの方は良く使うけれども、英語にしたからって別に言っていることに重きが置かれるわけではない。ただなんとなく外国語の方が権威があるように聞こえるというだけの話だと思うんです。

外国生まれの名詞は仕方ないですが、最近は難しい形容詞や動詞まで日本語の中に混ぜることもありますが、あまり感心しませんね。日本語は日本語できちり話し、英語は英語できちり話せば良い。私はそう心がけています。そうすれば日本語の中で表現する方法を覚えていって日本語自身も生きてきます。文章もうまくなるし表現も豊かになりますよね。毎日の積み重ねだと思います。

歳取ったときに綺麗な言葉話す事が出来ていれば、それが文明・文化になるわけですよ。

言葉は内面からにじみ出るもの

池崎 先日、日経新聞の方とお話したのですが、英語がお上手な方は日本語も綺麗だとおっしゃってました。言葉に関心をお持ちの方はどの言語でも綺麗にお話しになるということですね。

安田 それはいえると思いますよ。特に女性で、一芸に秀でているような方は言葉の使い方も、非常に勉強されていますね、とても綺麗です。要は、言葉というのは内面から染み出すものだと思うんです。

若い人たちが使う「～でえ」というような言い方は昔からあったと思うのですよ。例えば神田の「べらんめえ」調だって当時はもしかしたら他の地域や階級の人々から「何だあれは」って思われていたかも知れないですよ。

良い言葉は続くけれども、変な表現や言葉は消えていくのでしょうか。言葉は新陳代謝というか、変わっていくものですから、新しい表現が加わって変化し、いいものが加わって新しい日本語が生きていく。英語でもフランス語でもそうではないですか？フランス語は非常に大切にすることから、発音も言葉も非常に大切にしていますよね。日本は割と日本語を大切にしない。もったいないよね。

池崎 その原因は学校なのか社会なのか・家庭でしょうか。今の子供達を見ていると日本語も英語も中途半端になってしまうのではないかと心配をしています。

安田 それはとても難しい問題ですね。

池崎 最低限、言葉は親がしつけるということ意識するところから進めないといけないでしょうか。



安田 そうですね。人生における最初の先生は両親でしょうか？そこから教えないと。親御さんはその親御さんに習ってないから自分の子供に教えられないのでしょうか。これはどこかでふみとどまってちゃんとした日本語を教えるという風潮を作り出さないかね。

池崎 家庭の中でしつけはしつこいほど繰り返さないと子供には定着しないですよ。ビジネス日本語は重要な任務、使命を遂行するための言葉と考えていますが、ビジネスの現場で鍛えられた経験をご両親から是非お子様に話していただきたいですね。

ことばのしつけの難しさ

安田 ただ私が非常に難しいと感じていることは、子供というものは仲間がやらないことをやることにひどく抵抗を示します。私にも5歳と3歳の孫がいますが、私の長男が言葉に関してとても厳しくしつけているんです。もちろん孫達はお父さんが怖いので従いますが、孫と後で話すときには「パパはああいうけど、幼稚園のお友達誰もそんな事は言わないの」と言うんですよ。分かりますよね。大人でもそうです。他人がやらない事は自分もやりたくないんです。仲間はずれにされる可能性もありますし。そういうことを考えながらやらなくてはね。

また、僕らが「礼儀正しい」言葉と思っている言葉は若い連中にとっては「格好良くない」。若い子供達っていうのは「格好良い・悪い」が非常に重要なんですよ。私達も若い頃はそうでしたからその気持ちはよく分かります。その中でどう教えていくか。昔は親、学校の先生が相当の権力を持っていたから、子供たちは従わなくてはならなかったですが、今はそうではないですから。

池崎 そうですね。「取り澄ましてる」と思われたり、気持ちの抵抗が問題ということですね。JRPの「日本語サミット」でも「平和」の問題をお友達が話さない中で自分が話したりすると周りが白けてしまうという指摘もあります。

安田 母方の祖母が学習院だったのですが、葉山に隠居していた際に長唄などをよく歌っておりました。そうすると学校時代のお仲間が集まってきて遊ぶのです。そのときのおしゃべりなどが非常に美しい言葉だったのを今だに覚えています。このようなモデルケースを作ったら大人も綺麗な言葉に対する憧れを持つのではないですか。

池崎 貴重なお話を本当にありがとうございました。